

「伝え合う力」を育む援助のあり方

～言葉で表現する活動を通して～

沖縄市立宮里幼稚園

教諭 古謝 百合子

I テーマ設定の理由

幼児を取り巻く環境は、急激な社会の変化に伴い大きく変化してきた。情報化社会がますます進む現在、幼児も毎日マスメディアによる情報に浸り、テレビゲームなどをして遊ぶ時間が増えるなど生活形態が変わってきている。そのため、家族との言葉のやり取りさえも少なくなり、自分の考えや思いを言葉で表現できず、気持ちを伝え合うことが苦手な子が多くなっている現状がある。

幼稚園教育要領の「言葉の獲得に関する領域『言葉』」の「内容の取扱い」において、「言葉は、身近な人に親しみをもって接し、自分の感情や意志などを伝え、それに相手が応答し、その言葉を聴くことを通して次第に獲得されていくものであることを考慮して、幼児が教師や他の幼児とかかわることにより心を動かすような体験をし、言葉を交わす喜びを味わえるようにすること」としている。

子どもたちが楽しく幼稚園生活を送るためには、日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、先生や友達と心を通わせる必要がある。

本園児の言葉の育ちに目を向けてみると、人前で話をする場面において、大勢の前で話をするのが苦手だったり、順序立てて話すことができなかつたりする子が多く見られる。

また、話を聴く側の幼児の実態として、人の話を聴こうとしない態度や相手の心を傷つける言い方など「伝え合う力」を育てる上で、大きな課題がみえてきた。

子どもたちは、さまざまな体験活動の過程で、自分の感じた思いを表現できずにいる。それらを言葉で表現できない時に、うなずいたり、ほほ笑んだりなど言葉以外のもので表現している

ことがある。これまでの保育を振り返ると、このような子どもの表現をくみ取り、言葉として引き出すことができず、話したいという意欲を盛り上げることができずにいた。

そこで、「その子なりに感じた思い」をみとり、言葉として表現できるように援助することで、人前で順序立てて話をするようにしたいと考える。また、友達の話の聴き、その思いを受けとめて応答する楽しさが味わえる活動を取り入れ、友達や教師と思いを共有できる場づくりをすることで、言葉による「伝え合う力」を育むことができるのではないかと考える。

以上のことから、言葉で表現する活動を通して、身近な人とかかわり、言葉で伝え合う場の設定や援助の仕方を工夫することにより、幼児一人一人が自分の言葉を育て、「伝え合う力」を育むことができるであろうと考え、本テーマを設定した。

II 目指す幼児像

- 思いや考えを伝え合い、心を通わすことができる子
- 身近な人とかかわり、楽しく活動できる子

III 研究目標

言葉で表現する活動を通して、身近な人とかかわり、「伝え合う力」を育むための援助のあり方

IV 研究仮説

1 基本仮説

身近な人とかかわり、言葉で表現する活動を通して、言葉で伝え合う場や援助の仕方を工夫

することにより、思いや考えを伝え合うことができるであろう。

2 具体仮説

- (1) 言葉の獲得と表現について捉えるとともに、「伝え合う力」を育む環境を構成するための条件について理論研究をすることにより、援助のあり方が明確になるであろう。
- (2) 言葉に関する実態調査や分析をし、年間指導計画を作成することにより、幼児の実態に応じた伝え合う活動や援助の工夫ができるであろう。
- (3) 身近な人とのかかわりを通して、応答する楽しさが味わえる活動を取り入れることにより、「伝え合う力」を育むことができるであろう。

V 研究構想図

次ページ

VI 研究内容

1 研究内容 1

(1) 言葉の獲得と表現について

国立教育政策研究所・教育課程センターによる「幼児期から児童期への教育」において「幼児期は、コミュニケーションの仕方が、身体表現による伝え合いからその土台の上に言語表現が育ち、言語表現による伝え合いへと、大きく変化していく時期にあたる。」とし、幼児期から児童期の教育を豊かにする視点として、言語表現の育ちをとりあげている。

そこで、幼児期に言葉がどのように獲得されていくのか、幼児の言語発達段階の特徴を捉えることから理論研究を進めることにした。

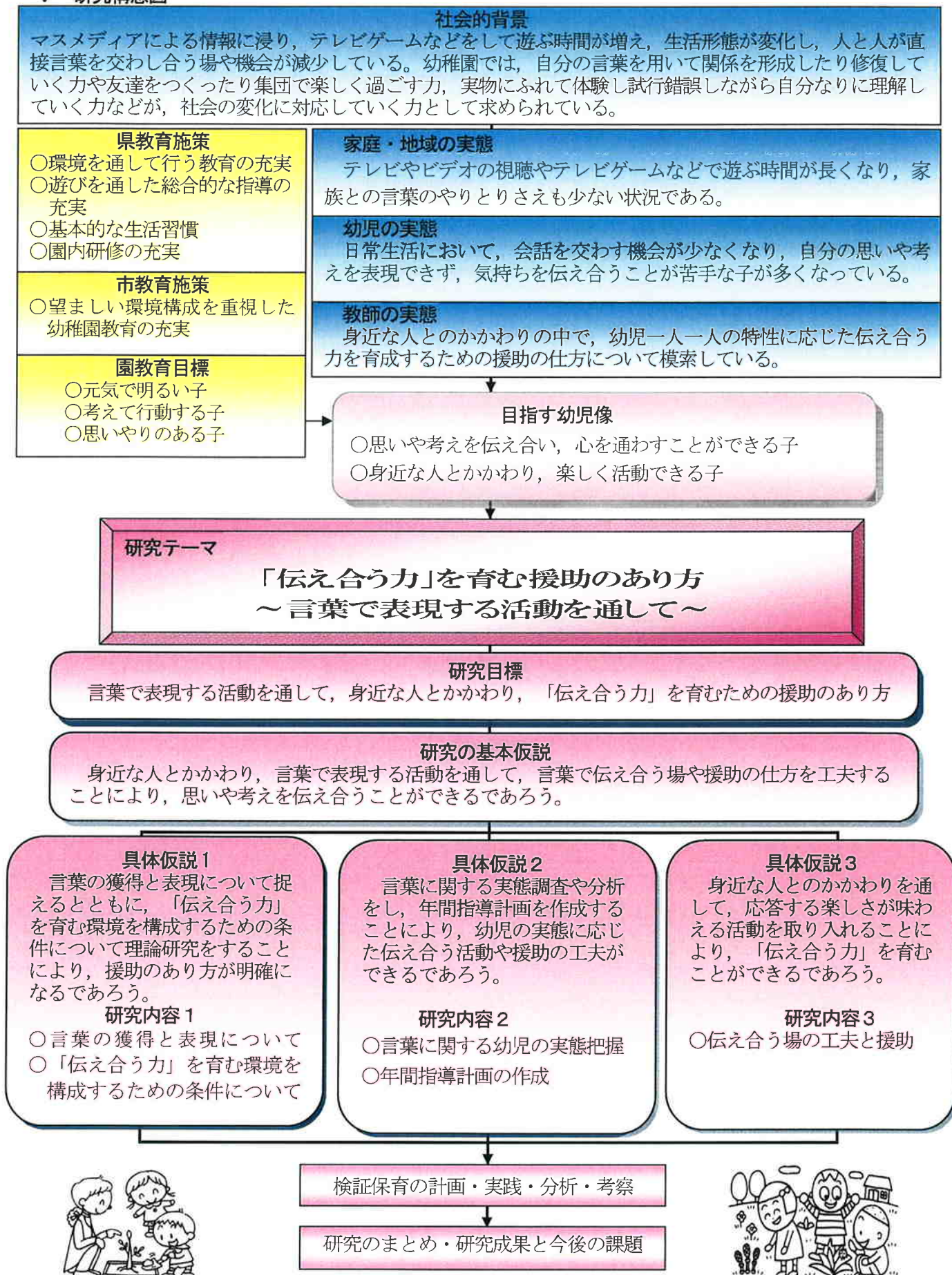
① 幼児期の言葉の発達について

言葉の発達段階について大久保 愛「幼児のことばとおとな」と民秋 言監修「2008年ラポム4月号特別付録② 保育のキホン 発達手帳0～6歳」に示されているものから次のように捉えた。

ア 言葉の発達段階

年齢	(発達段階のとらえ)		特徴
	硯川和歌子	大久保愛	
0～1	準備期	ことばの準備期	・喃語期、母音を盛んに発音する。
1～1歳6か月	片言期	一語文の時期	・一語文を使い始め、身振りとともに自分の意思を伝える。
1歳6か月～2歳	命名期	二語文の時期	・イメージを持って発語し二語文を話す。 ・なんでも知りたがる。
		第一期語獲得期	
2歳～2歳6か月	羅列期	多語文、従属文の発生	・三語文を話し、会話を始める。
2歳6か月～3歳	模倣期	文章構成期	・発音がはっきりする。 ・大人の言葉のまねをする。
3歳～4歳	成熟期	一応の完成期	・言葉を使って日常のやりとりをする。 ・名詞や助詞を使い複文を話す。 ・文字を読み始める。
4歳～5歳	多弁期	おしゃべりの時期	・話す意欲が高く、言葉によるコミュニケーションが旨くなり、特定の仲良しグループを作ったりする。
5歳～6歳	適応期	第2期語獲得期（おとなことば模倣期）	・相手に応じて、言葉づかいを変え、自分の体験を言葉にして伝えようとする。
6歳～入学まで		就学前期（文字興味時代）	

V 研究構想図



言葉の発達段階から、乳幼児は言葉を獲得し、言葉で自分の意思を伝え合い、身近な人とかわる手立てとしている。そこで、援助のあり方を考えていく上で、特に幼児期後半（4歳頃～6歳頃）の言葉の発達の特徴を具体的に捉える。

イ 幼児期後半の言語発達の特徴：4歳～6歳

- ・友達との会話を楽しむことができる。
- ・集団での話し合いに参加できる。
- ・今現在の場面から離れた経験の内容（過去、未来、見たこと、知っていること）を話すことや聴くことができ、物語的な内容などの話も理解できる。
- ・話題からそれずに、出来事の順番を追って話したり、「思ったこと、感じたこと」など感情表現ができたりする。
- ・相手にわかるように焦点を絞って簡潔に話したり、「～だから～だよ」と因果関係を捉えて話したりすることができる。また、「もし～だったら」と仮定形の手紙を使って相手の立場に立って、考えて話すことができる。
- ・内言（心の中で蓄える言葉）により自分の行動がコントロールでき、行動についても計画的表現ができる。
- ・自分から言葉の意味をたずねたり、簡単な言葉の説明ができるようになる。また、新しい言葉や言い回しを色々な場面で使いながら、言葉の意味を知り、使うことができるようになる。
- ・重文「～と、～たり、～でも」や複文「～とき、～みたい、～ぐらい」の表現ができ、続けて話せるようになる。
- ・文字の意味や機能に気づき、その後に正しい文字を書こうとする。

以上の発達段階特徴を踏まえた支援の手立てを考え、活動を計画することが大切である。

② 幼稚園教育要領「言葉」の捉え

言葉と表現について文部省（平成11年）「幼稚園教育要領解説」では、次のように示されている。

「言葉は、身近な人とのかかわりを通して次第に獲得されるものである。人とのかかわりでは、見つめ合ったり、うなずいたり、ほほ笑んだりなど、言葉以外のものも大切である。幼児は気持ちを自分なりの言葉で表現したとき、相手が

うなずいたり、言葉で応答したりするともっと楽しくなり、もっと話そうとする。さらに、自分の話を聴いてもらうことにより、人の話も聴こうとする気持ちになり、このような過程を経て、人の話を聴いて日常生活に必要な言葉もわかるようになる。また、幼児のものの見方や考え方は、言葉を使うことによって確かなものになっていく。」

さらに、幼稚園において言葉を使って表現する意欲や態度を育てる上で大切なこととして以下の事が示されている。

- ア 生活の中で心を動かし、言葉で伝えたいくなる体験を豊富にもつこと
- イ 自分の経験したことや考えたことを自分なりに話すこと
- ウ 友達や教師の話を聴くことなど伝え合う喜びを味わうこと

以上のことから、幼稚園教育では、日常生活において、身近な人とかわり自分の気持ちを言葉で表現し、相手に伝え、お互いの思いを伝え合うことで言葉の感覚を豊かにできると考える。

③ 幼児期の言葉の獲得における「自分なりの言葉で表現する」ことの意義

小川博久らによる「新幼稚園教育要領の解説」では、以下の3点で述べられている。

- ア 教師や友達の言葉や話に興味をもち、聴こうとする態度が育つことについて

先生や友達との間に安心して話せるような雰囲気があることや、相手に聴いてもらえるという信頼感が存在することにより、幼児は、教師や友達の話に興味や関心を持って主体的に聴くようになる。また幼稚園では、集団生活で使う特徴的な言葉「みんな、順番」といった家庭生活ではあまり使わない言葉に出会う。

初めは、言葉の意味が理解できなくても教師や友達の言葉を聴き、一緒に行動することを通して、次第に言葉の意味を理解できるようになる。

- イ 自分の経験したことや感じたことを自分なりの言葉で表現することについて

幼児は園生活の中で心を動かされるような体験をした時に、親しい人に伝えたい。心を

動かす体験としては、楽しかった体験だけでなく、自分で気づいたことや発見したこと、美しさや不思議さを感じたことというように様々な機会がある。

だが、自分の伝えたい内容を言葉で表現することは、幼児にとっては難しい場合が多い。このような時に、言葉だけでなく表情や動作などを交えた表現を教師が肯定的に積極的に受けとめ、相互的にかかわりながら理解してあげることによって、幼児は自分が表現したかった内容を教師は分かってくれるという信頼感がもてるようになる。この信頼感に支えられて、幼児は安心して自分なりの表現をするようになる。そして、自分なりの表現が周囲の人に受けとめてもらえるという喜びと満足感を味わえるようにすることで、言葉で表現してみたいという意欲が高まっていくのである。

ウ 自分なりの表現が相手に伝わる表現へと変わっていくことについて

幼児は園生活において、自分のしたいことや相手にしてほしいことを相手に伝えることの必要性を理解していく。さらに、自分なりに表現しても、それが相手に伝わらなければその思いは実現できない。そうした問題に直面したときに、言葉による表現を相互理解のできるものに変える必要性がでてくる。その時に教師が大事な役割を果たすことになる。その役割とは、どのように言葉で表現すれば伝わるのかを教師がアドバイスすることである。そのアドバイスを受け、自分なりの表現を相手に応じて変えていく経験を通して、自分の思いや要求などを相手に分かるような表現で伝えていくことを理解する。

(2) 「伝え合う力」を育む環境を構成するための条件について

「伝え合う力」を育むためには、幼児の言葉を育てなければならない。幼児の言葉の発達にとって、どのような環境にかかわることが必要なかを捉える。

①言葉での表現が豊かになる言語環境

身近な人との関係が安定し、言葉での表現が豊かになる言語環境とは、高杉自子らによる

「保育内容 言葉」では具体的に次のようなことがあげられている。

- ア さまざまな人々と出会う機会
- イ さまざまな行事や出来事との出会い
- ウ 状況に応じた文脈的な言葉の使い方との出会い
- エ 体験をことば化する機会
- オ 言葉遊びを通してことばのおもしろさを学ぶ機会
- カ 友達や保育者とおしゃべりを通して言葉を交わす楽しさを味わう機会
- キ 文字文化に接する機会

これらの環境において活動を展開する時に幼児は、言葉の獲得も十分ではなく表現できず、表情や身振り、声の調子などで表現することがある。森上史郎は、「幼児教育への招待」の中で「幼児は幼児なりに、一人一人がいろいろの考えや思いをもっている。それを相手にわかるように伝えようとしている幼児なりの努力や試行錯誤をしっかりと受けとめ、援助するなかで、伝え合う喜びが育っていく。それには聴き手としての保育者の役割も重要である。幼児は自分と向き合って真剣に応答してくれる人を求めている。」と保育者の役割の重要性について述べている。

②人的環境条件としての保育者の存在

大越和孝らによる「保育内容『言葉』言葉とふれあい、言葉で育つ」の中で保育者の役割について以下のように示している。

ア 語りかけ

保育者の語りかけは、子どもの言葉を引きだし、行動を起こすきっかけとなる。

イ 聴き手の存在

幼児にとって、保育者は好きな人であり、きわめて親しい心安まる存在であって、何でも聴き入れて対応してくれる信頼すべき存在である。

ウ 好きな人の役割

じっくりと子どもの心に向き合って話を引き出し、聴ける保育者、それは子どもにとって大好きな存在である。

エ 親しみを持つ

親しみの関係が幼児の心を開き、話すこと聴くことが相互に楽しく営まれるようになる。保育者が幼児にかかわるとき、大切なそして難し